駒沢地理集落地理特集によせて

綿貫勇彦教授なくなって18年，駒沢に育ぐくまれた人達が考えきたったものを集めて，ここに集落地理の観点から，各論を集めてみた。恩師の思索なり，実践方法からみれば弟子達の諸論は未熟であり，歯がゆいことと思うが，せいいっぱいの勉強であり，今後に期待をしていただくほかはない。

戦後の集落地理学の発達いや発展は，聚落時代の期を脱して，方法の確立，調査の指向に学派を越えて盛んである。駒沢学派とてその例外ではなく，綿貫教授の形態論より，深谷正秋氏などの生態的導入の方法を育てて，論理の道を押進め諸先学にごして学的開拓に努力している。

綿貫教授と共に当時の学的教養をもりたてた日本仏教史の圭室諦成教授も，熊本の地よりこの度明大大学院教授にむかえられ，この編の学的立場を見守ってくれた。顧みるに駒沢の現在迄の聚落地理より，集落地理学への学的努力は，多田文男，内田寛一，岩田孝三，井上修次，小川徹，赤峰倫介，井関弘太郎，今朝洞重美，大和英成，桜井正信などの諸氏が学内でその灯をもちつづけ，諸学生の指導と学問態度を維持して今日に至った。

駒沢の今日あるのは，単に教授陣の近親関係のみでなく，各教授の人物的個性を中心に地理眼を拡げて，新らしい意慾を育てていたことによる。戦後の変かく期に岩田孝三氏の努力，小川徹氏の病身にむちうち，学問の情熱をかたむける態度，井上修次氏の熱と希望の踏査法など，綿貫学を認めながら，独自の領域にせまるものは，駒沢学派のみならず，学界に大きな足跡をしめしている。

綿貫教授の指導のもとに深谷正秋氏が「条里の地理的研究」(1931) を世に応えてから久しいが，戦前，師弟のもとに学的成果を得ている駒沢にしては，この度の「集落地理特集」は，そまつである。が，深谷氏も戦で散ったいま，綿貫，深谷ラインから直接得られない教養を深めていただき，世の先学各位の駒沢という特殊の学園に，集落地理の根が消えずと，温情をいただければ幸甚と思う。

駒沢の学的気運もゆるやかな流れではあるが，次第にルネッサンスをはじめ，研究室の思想も，学園の理解と相まって，先学に負けずという立場を明らかにしてきた。

駒沢地理学課開講20週年の足跡をみつめながら，この集落地理の特集は，貧しく苦しい。が，現役教授，助教授，講師，竝に駒沢同窓の，今後の学的労作をみつめ願って，諸先学の温かい御指導を得たく思う。

綿貫勇彦教授，深谷正秋学兄の，御めいふくを祈って，ここに，集落地理特集を編した次第である。

昭和35年6月1日

桜　井　正　信